

# 女子大学生およびその母親の認知する被養育経験の母子伝達 — 児童期被養育経験尺度の再分析を通して —

三浦 香苗・田中 千穂

## Information transmission between mothers and daughters on feelings about their upbringing

Kanae MIURA and Chiho TANAKA

Data from a previous study were reanalyzed (a) to develop the Scale of Childhood Discipline and (b) to identify intergenerational communication between mothers and daughters about feelings regarding their upbringing. Factor analysis identified three factors related to feelings about how mothers of female university students were brought up. These included active involvement (Instruction), social roles (Roles) and interest in emotions and affects (Interest). Results suggested that combinations of these three factors formulated feelings about a person's upbringing during childhood. Such feelings suggested that there were differences in how mothers raised their children, indicating that feelings of mothers about their upbringing influenced how they raised their children. However, in relation to a mother's feelings about her upbringing, differences in the female university students' perceptions on how they were raised during childhood were seen for only Roles. It was shown that mothers had dealt with Instruction and Interest in ways independent of their feelings about their upbringing.

*Key words* : *scale of feelings about one's upbringing* (被養育経験尺度),  
*types of feelings about one's upbringing* (被養育経験型),  
*intergenerational transmission* (世代間伝達),  
*female university students' perceptions on how they were raised* (女子大学生の被養育経験)

### 問題と目的

現在の大学生の母親は戦前にしつけを受けた祖母に養育された世代である。戦後の大きな価値観の転換によって、祖母が受けたしつけと子どもである母親に対して行ったしつけの間には大きな差異があると考えられる。しかし、一方では自分の受けたしつけを基にしてわが子へのしつけを行うというしつけの世代間伝達も考えられ、それが家風として、それぞれの家庭の独自性の基礎となっている可能性もある。

本論文では、この母親の被養育経験の個人差およびその型について扱う。つまり、母親の被養育経験はどのようなものであり、その特徴の型に

よって、子どもである大学生の小学生期に行ったしつけには差異が見られるのか、また、子どもはそれをどう認知しているかを明らかにする。

前報告(三浦・田中, 2011a)では、都内女子大学に通う女子大学生とその母親の91組の資料に基づいて、しつけ尺度を確定し、母親が受けたと認知する被養育経験(しつけ)・母親の行った養育経験(しつけ)・子どもである女子大学生が受けたと認知する被養育経験(しつけ)の間の関連を見た。

ここでは、前々論文(田中・三浦, 2010)から想定した8尺度29下位尺度を基に分析し、以下のような結果が得られた。

①受けたしつけ(被養育経験)に関しては、

「受容・共に行動・他家族との交流・将来の展望・文化との出会い・意思の主張」では女子大学生の方が多くなされたと認知し、「友達との交流・規律・職業との出会い・忍耐・良いモデル・学習意欲」では母親の認知の方が高かった。(田中・三浦, 2011)

- ②母親が受けたしつけと行ったしつけに関しては、一般に受けたしつけより行ったしつけの方が高い値を取った、つまりより多くしつけたと判断したが、その差の大きなものは「受容・ともに行動・他家族との交流・意思の主張・学習意欲」であり、逆にしつけられた以上にはしつけていないものは「役割分担・職業との出会い・忍耐・良いモデル」があった。(三浦・田中, 2011b)

ところで、前報告での分析は、予め想定した7尺度・29下位尺度に基づいており、それらの下位尺度の中には、必ずしも $\alpha$ 係数が満足いく水準でないものも見られた。また、受けたしつけの下位尺度は原則としてそれぞれ3項目ずつからなっているが、行ったしつけに関しては受けたしつけで用いた項目の内の2項目ずつを用いていた。母子間の相違の一般的傾向を見るといった上記のような結果を得るにはこの方法で問題はないと思われるが、本論文で問題とする被養育経験の個人差およびその型分けを行うには、より敏感で安定した被養育経験尺度を作成し、その尺度に基づいた分析を行う必要があると考える。

そこで、本報告では、まずより安定した、簡易な被養育尺度を構成する。次にそれに基づく母親の被養育経験型を作成し、この被養育経験型によって、子どもへの養育行動には差が見られるかを見る。そしてこの母親の養育行動を子どもである女子大学生がどう認知しているかを検討する。

## 方 法

入手した資料は前報告(三浦・田中, 2011a)と同一である。以下に簡潔に述べる。

### 1. 調査対象者および調査手続きなど

東京都内の私立女子大学生とその母親を調査対象とした。140人の女子大学生に依頼し、99人から回収された。そのうち、91組の完全資料を以後

の分析の対象とした。

質問紙調査の依頼をしたのは、2010年10月上旬、締め切りは11月中旬とした。

## 2. 調査内容

調査趣旨の説明書、学生向け質問紙、母親向けの質問紙の3種類からなる。

- 1) 学生向け質問紙 子ども時代に受けたしつけ8尺度合計下位29因子尺度の87項目を提示し、「当てはまる、よくされていた(5)、ややあてはまる、時々されていた(4)、どちらともいえない(3)、あまりあてはまらない、あまりされていない(2)、全然あてはまらない、全然されていない(1)」の5肢選択法で尋ねた。

### 2) 母親向け質問紙

- (1) 子ども時代に受けたしつけ

質問項目と形式は学生に尋ねたものと同一である。

- (2) 子どもに行ったしつけ

前述の子ども時代に受けたしつけの29下位尺度からの各2項目ずつの59項目について、親が子どもに行うしつけというように表現を変えたものを提示した。そして、母親が子どもの小学校低学年にどのようなしつけや育て方をしていたかを、5肢選択法で尋ねた。

## 結 果

### 1. 被養育経験尺度の作成

- 1) 子ども時代に受けた経験の因子分析

母親が子どもに行ったしつけとして提示した59項目(上記2)の(2))に対応する、2)の(1)の子ども時代に受けたしつけに関する59項目を因子分析の対象とした。この母親の「受けたしつけ」を本報告での分析の対象としたのは、この資料が「行ったしつけ」や学生が「受けたしつけ」との対応を見る上で最も基礎的な資料となること、また、前報告でも書いたが、母親資料の方が学生資料よりも安定性に優れていたためである。

59項目の主因子法の因子分析の結果、固有値1以上の因子数は14であり、全体の80.4%を説明していた。因子間の関連が想定されるので、斜交解により因子数を縮減した結果、因子構造および因子の解釈の可能性、その後の利便性を考慮して

3 因子解を採用した。3 因子解で全分散の 45.7% を説明している。表 1 にその結果を示す。尚、因子間の相関は、第 1 因子と第 2 因子間が .596、第 1 因子と第 3 因子が .533、第 2 因子と第 3 因子間 は .574 である。

第 1 因子は、「朝起きた時や寝る前に挨拶をするように言われた」（前分析で想定した下位尺度名では「規律」）、「食事時のマナーを注意された」（習慣形成）、「道草をしないように注意された」（規律）、「辛くても我慢するように言われた」（忍耐）や「名所などに連れて行ってもらった」（文化との出会い）、「図書館や博物館などに連れて行ってくれた」（文化との出会い）、「豆まきや七夕などの行事をしてくれた（共に行動）」などからなり、親として積極的に子どもの生活や行動に関与する内容に関わるものであり、{積極的関与（教化）} と命名できよう。

第 2 因子は、「洗濯物を干したり片付けたりした」（役割分担）、「自分の分担をきちんとするように言われた」（役割遂行）、「自分でできることは自分でするように言われた」（自立的態度）、「自分の持ち物の管理などに責任を持たされた」（整理整頓）や「おじさんやおばさんの仕事について話してもらった」（職業との出会い）、「おじいさんから仕事について話を聞いた」（職業との出会い）、「お正月などには、親戚が集まった（親戚との関わり）」などからなり、子どもなりに役割を持たせ、現在の自分の立場や将来の生活への準備と関わりがあると考えられ、{社会的役割（役割）} と命名した。

第 3 因子は、「元気がないときにはなぐさめてくれた」（受容）、「ひざに座らせたり、ぎゅっと抱きしめてくれた」（受容）や「家ではなんでも思ったことを話せた（会話）」、「仲直りをしたあとはそれをこだわらないように言われた」（発達に応じた行動）、「いつも笑顔でいるように言われた」（明るい態度）、「元気で明るく振舞うように言われた」（明るい態度）などからなり、{情緒への関心（関心）} と命名した。

平均値が高く天井効果が見られる項目を除外し（平均値 + 1/2 標準偏差が可能分布範囲を超えているものを除外）、因子分析の因子負荷量が当該因子に .55 以上で、他の因子への負荷量が .33 未満である項目のうち、因子負荷量が上位 7 番までの

ものを、各因子尺度を構成する項目とした。表 1 の因子負荷量に下線がありかつ強調文字のものがそれぞれの因子尺度を構成する項目を示す。これらの項目のみを抽出して確認のため再度因子分析を行ったところ、想定した因子構造が抽出された。表 2 に各因子尺度の平均値と標準偏差および  $\alpha$  係数を示す。3 因子尺度とも、平均値は 3 点台で、 $\alpha$  係数は、.825 から .850 の間にあり、安定性があることを示している。

また、3 下位尺度間の相関は、{教化} と {役割} 間は .48、{関心} とは .56、{役割} と {関心} 間は .44 である。

## 2) 母親の養育行動尺度および子どもの被養育経験尺度

母親が子どもに行ったしつけ（養育行動）は、上記方法の 2 の質問内容の母親向け質問紙の中で「(2) 子どもにおこなったしつけ」で尋ねた。これらの項目は、母親が受けたしつけ（被養育経験）を親が子どもに行うしつけというように表現を変えたものである（具体的表現は、三浦・田中 (2011a) を参照）。そこで、母親がどのようなしつけを子どもに行ったかを示す尺度として、被養育経験の 3 下位尺度を構成する被養育経験項目に対応する養育行動項目によって、養育行動の 3 下位尺度を構成した。

また、子どもである女子大学生には、母親と同一の項目からなる被養育経験項目を提示している。母親の被養育経験尺度に対応する尺度として、子どもの被養育経験尺度を構成した。

表 2 には、母親の養育行動尺度および子どもである女子大学生の被養育経験尺度の  $\alpha$  係数、平均値およびそれらの間の相関係数も示した。母親の養育行動尺度の  $\alpha$  係数は、母親の被養育経験尺度のものよりは若干低いものの、大学生の被養育経験尺度の  $\alpha$  係数よりは高い。養育行動の 3 下位尺度の平均値は、親が受けた被養育経験尺度および子どもの被養育経験尺度よりも高い。これらの結果は、前報告での結果と同一の傾向である。

母親と子どもである女子大学生の被養育経験 3 下位尺度得点に差があるかどうかを、対応のある  $t$  検定で調べたところ、第 1 尺度の {教化} は  $t(81) = 3.26$ 、第 3 尺度の {関心} は  $t(81) = 2.75$  と、1% 水準で女子大学生の方が有意に高いが、第 2 尺度である {役割} に関しては、有意ではな

表1 母親の被養育経験尺度の因子分析結果(下線のついたものは採用項目)

項目番号	具体的項目	平均(SD)	教化	役割	関心
33	朝起きたときや寝る前の挨拶をするように言われた	4.03 (1.125)	<u>.696</u>	-.051	.167
73	名所などに連れて行ってもらった	3.22 (1.217)	<u>.674</u>	-.124	-.028
19	食事のマナーを注意された	4.23 (1.002)	<u>.671</u>	-.119	.233
64	つらくても我慢するように言われた	3.28 (1.161)	<u>.648</u>	.249	-.296
15	悪いことをしたときには、厳しく叱られた	4.45 (0.912)	.627	-.249	.324
58	図書館や博物館などに連れて行ってくれた	2.68 (1.360)	<u>.614</u>	.228	-.158
60	「親のおかげで今生活できているのよ」とよく言われた	2.92 (1.472)	<u>.609</u>	.060	-.460
21	道草をしないように注意された	3.61 (1.093)	<u>.600</u>	-.145	.168
32	豆まきや七夕などの行事をしてくれた	3.95 (1.210)	.586	.181	-.112
4	一人で留守番させないように気をつけてくれた	3.62 (1.406)	.581	-.286	.204
18	方々に一緒に出かけた	3.53 (1.274)	.556	-.109	.166
43	地域の運動会やお祭りには一緒にいった	3.78 (1.185)	.528	.235	-.176
77	約束は守るように注意された	4.18 (0.909)	.495	.052	.342
85	約束の時間を守るように言われた	4.07 (1.060)	.484	-.101	.421
20	友だちのお母さんと母親は連絡しあっていた	3.54 (1.149)	.481	.177	.146
1	翌日の準備は前日にすることを教えられた	4.47 (0.950)	.469	-.047	.152
86	人に会ったら挨拶をするように言われた	4.55 (0.789)	.451	.148	-.027
6	親を見習うように言われた	2.59 (1.078)	.419	.373	-.112
87	皆からほめられるような人になるように言われた	2.95 (1.130)	.405	.011	.247
61	友達の見本になるようにいわれた	2.31 (1.060)	.323	.285	-.122
49	成績が上がると親は喜んでくれた	4.40 (0.754)	.250	.081	.067
42	洗濯物を干したり片付けたりした	3.39 (1.252)	-.328	<u>.871</u>	.120
59	自分の分担をきちんとするように言われた	3.28 (1.262)	-.090	<u>.806</u>	.042
40	いとこなどとよく遊んだ	3.79 (1.199)	.092	.656	-.377
13	自分で出来ることは自分でするように言われた	4.20 (0.963)	.041	<u>.643</u>	-.022
57	おじさんやおばさんの仕事について話してもらった	3.39 (1.252)	.059	<u>.635</u>	.050
52	自分の持ち物の管理などに責任を持たされた	4.18 (0.922)	.006	<u>.626</u>	.040
63	おじさんから仕事について話を聞いた	2.81 (1.507)	-.074	<u>.626</u>	-.010
65	お正月などには、親戚が集まった	4.10 (1.312)	.066	<u>.581</u>	-.306
79	貧しい国の子どもの話などを聞かされた	2.97 (1.231)	.166	.550	.124
39	地域のお祭りには一緒に参加した	3.67 (1.168)	.298	.524	-.422
8	小学生になったら、してもいいことが増えた	3.27 (0.910)	.036	.511	.002
16	自分で学校の準備をするようにさせられた	4.61 (0.867)	-.015	.508	.147
66	勉強が好きであった	3.10 (1.089)	-.376	.450	.349
46	皆で出かけるときには、自分がすることが決まっていた	2.78 (1.156)	.049	.430	.364
69	将来どんな仕事につきたいか聞かれた	3.14 (1.212)	.308	.407	.009
56	友だちの家族と行き来があった	3.48 (1.275)	.151	.396	.195
17	熱心に勉強していると親は嬉しそうであった	4.01 (0.946)	.337	.339	-.150
30	お父さんやお母さんの仕事についてよく話を聞いた	3.36 (1.207)	.083	.330	.284
7	友達とよく遊ばせてくれた	4.55 (0.759)	.150	.268	-.011
11	元気がないときにはなぐさめてくれた	3.67 (1.095)	-.152	.076	<u>.746</u>
71	家では何でも思ったことを話せた	3.69 (1.242)	-.011	-.330	<u>.733</u>
83	ひざに座らせたり、ぎゅっと抱きしめてくれた	3.49 (1.170)	-.160	-.063	<u>.713</u>
72	仲直りをしたあとはそれをこだわらないように言われた	3.23 (1.217)	.021	-.077	<u>.704</u>
36	いつも笑顔でいるように言われた	3.17 (1.059)	.163	.075	<u>.646</u>
37	元気で明るく振舞うようにいわれた	3.03 (1.061)	.273	.086	<u>.572</u>
54	友達を大切にするように言われた	4.06 (0.969)	.125	.274	<u>.563</u>
29	食事中に学校で起こったことなどを良く話した	3.70 (1.182)	.270	-.155	.530
81	食事を一緒に作った	3.57 (1.137)	-.157	.379	.520
44	私のことを第一に考えてくれた	3.82 (1.018)	.113	-.001	.509
82	大人から勉強の話をされるのがうれしかった	2.64 (1.089)	-.220	.448	.465
34	友だちの悪口は言わないように言われた	3.49 (1.055)	.380	.060	.462
47	約束の時間を守るように言われた	4.13 (1.054)	.452	-.002	.461
14	暴力をつかわないように言われた	3.69 (1.210)	.197	.015	.447
80	つらいときこそ努力するようにいわれた	3.29 (1.094)	.194	.181	.441
23	どんなふうを考えているのかを聞かれた	3.06 (1.022)	.379	.195	.410
38	みんな忙しいので、食事は別々であった	1.89 (1.176)	.102	.221	-.385
62	一度やるといったことはきちんとやるようにいわれた	3.59 (1.121)	.240	.280	.366
55	言いたい事は言うように言われた	3.39 (0.992)	.320	.206	.329

表2 被養育経験と養育行動変数の相関分析の結果

		平均 (SD)	α 係数	母親の経験		母親の行動			大学生の経験		
				役割	関心	教化	役割	関心	教化	役割	関心
母親の被養育経験	教化	3.60 (.83)	.83	.48	.56	.55	.44	.49	.38	.27	.29
	役割	3.43 (.90)	.85		.44	.49	.78	.44	.29	.50	.20
	関心	3.48 (.81)	.85			.47	.31	.60	.32	.22	.21
母親の養育行動	教化	4.06 (.59)	.72				.70	.68	.51	.46	.36
	役割	3.59 (.80)	.83					.50	.33	.56	.23
	関心	3.93 (.65)	.83						.32	.32	.38
大学生の被養育経験	教化	3.90 (.62)	.68							.54	.57
	役割	3.32 (.68)	.75								.52
	関心	3.59 (.69)	.74								

太字は相関係数が $p < .01$ で有意であることを示す。

いが ( $t(66) = 1.36, p = .18$ )、母親の評定値の方が高かった。{教化} や {関心} は女子大学生の被養育経験量が多いが、{役割} に関しては、逆の傾向にあることが示された。

また、母親の被養育経験の下位尺度と養育行動のどの下位尺度に差があるかを対応のあるt検定で見たところ、{教化} は  $t(81) = 5.75$ 、{関心} は  $t(81) = 5.91$  と、.01%水準の有意差で養育行動が高いが、{役割} に関しては養育行動の方が高いという傾向ではあるが、その差は有意ではない ( $t(69) = 1.40, p = .17$ )。一般に受けた以上の養育行動を行っているが、{教化} と {関心} については明らかに受けた以上の養育行動を行っていた。

### 3) 被養育型の作成

母親の被養育経験の3下位尺度のそれぞれについて、平均値以上か否かの組み合わせで、8つの型を作成した。それぞれの型に属する人数および各下位尺度の平均値を表3に示す。その型に属する人数が最も多いのは、3下位尺度とも高い群の22名で、全体のおよそ3分の1を占める。次に多いのは、いずれも低い群の16名で、全体の4分の1を占める。これに続くのは、第1下位尺度の{教化} と第2下位尺度の{役割} が低くて、{関心} が高い群が8名、そして{教化} と {関心} が高く、{役割} が低い群が7名存在する。これら4群で53名と全体の79%を占める。

### 4) 4つの被養育型群の特徴

ここでは、対象母親数が比較的多かった4つの型の特徴を明らかにする。表4には、被養育経験

尺度の3つの下位尺度および昨年度分析に用いた7尺度29下位尺度のしつけ尺度の結果を示す。また、これら4つの型を独立変数とし、上記の下位尺度を従属変数とする分散分析の結果および分散分析が有意になった場合に実施したTukeyのHSDによる下位検定の結果も表4に示す。

第Iの型は、3下位尺度の全ての値が平均以下の群で、子ども時代にどの種類の養育経験も多く受けていないと認知している群である。この型は分類基準となった3下位尺度の値が低いのはもちろんであるが、しつけ尺度の11下位尺度全てで最低の数値を示している。「放任群」と命名する。

第IIの型は、{関心} に関しては、第IV群に次ぐ高い値であるが、他の2つの下位尺度では第I群に次ぐ低い値である。しつけ尺度の下位尺度でも同様な傾向で、11下位尺度中、「地域活動」と「学習意欲」以外の9下位尺度で、第I群に次ぐ低い値である。子どもの情緒への関心が高いが、いわ

表3 被養育経験の群別結果

分類基準			人数	下位尺度		
教化	役割	関心		教化	役割	関心
低	低	低	16	2.71 (.85)	2.56 (.64)	2.70 (.64)
低	低	高	8	3.00 (.65)	2.68 (.46)	4.05 (.35)
低	高	低	3	2.67 (.30)	4.24 (.68)	2.52 (.87)
低	高	高	3	3.43 (.25)	4.05 (.30)	4.008.43)
高	低	低	4	4.11 (.41)	2.68 (.46)	2.79 (.36)
高	低	高	7	4.02 (.19)	3.06 (.39)	3.92 (.28)
高	高	低	4	3.93 (.25)	4.07 (.47)	3.04 (.24)
高	高	高	22	4.32 (.39)	4.21 (.44)	4.17 (.46)
欠損値群			32			

表4 被養育尺度およびしつけ下位尺度の群分散分析結果

群	I 放任群	II 受容群	III 教育ママ群	IV しっかり群	F	df	p	下位検定
人数	16	8	7	22				結果
被養育尺度	教化	2.71 (.85)	3.00 (.65)	4.02 (.19)	4.32 (.39)	26.80 (3,49)	***	I, II < III, IV
	役割	2.56 (.64)	2.68 (.69)	3.06 (.39)	4.21 (.44)	34.33 (3,49)	***	I II, III < IV
	関心	2.70 (.64)	4.05 (.35)	3.91 (.28)	4.17 (.46)	30.35 (3,49)	***	I < III, II, IV
容認と支援	関わりの重視	3.46(1.04)	3.67(.86)	4.14(.69)	4.42(.55)	5.14 (3,48)	**	I, II < IV
役割	地域活動	3.33(1.13)	3.50(1.05)	3.43(.50)	4.33(.67)	4.92 (3,49)	**	I, III, II < IV
規範と期待	慎重な行動	3.48(1.10)	4.33(.43)	4.52(.54)	4.64(.45)	8.62 (3,49)	***	I < II, III, IV
	他家族との交流	2.33(.74)	2.83(.93)	3.05(.45)	4.17(.66)	22.41 (3,49)	***	I < III : II, III < IV
	親への尊敬	2.13(.90)	2.38(.79)	2.86(.88)	3.21(.91)	5.14 (3,49)	**	I < III : II < IV
多様な活動の場	将来の展望	2.35(.86)	2.79(.99)	3.24(.74)	3.83(.54)	12.75 (3,49)	***	I < III : II < IV
価値観	正しい行い	3.48(1.02)	4.25(.61)	4.71(.30)	4.80(.27)	14.22 (3,49)	***	I < II, III, IV
自己確立	良いモデル	1.85(.78)	2.46(.43)	3.14(.60)	3.29(.78)	13.46 (3,49)	***	I, II < III, IV
	意思の遂行	2.69(1.06)	3.63(.90)	3.76(.32)	4.44(.55)	15.87 (3,49)	***	I < II, III < IV
社会的能力	好き品行	2.60(1.19)	4.08(.56)	4.14(.64)	4.17(.64)	13.10 (3,48)	***	I < II, III, IV
学習への傾倒	親の学習への期待	3.40(.71)	3.96(.55)	4.61(.30)	4.44(.58)	11.84 (3,49)	***	I < II, IV : II < III
	学習意欲	2.42(1.01)	3.37(1.01)	2.48(.74)	3.50(.96)	6.69 (3,49)	**	I, III < II, IV

\*\*\* :  $p < .001$ . \*\* :  $p < .01$ .

ゆる規範の提示や役割の実行は求めているので「受容群」と命名する。

第III群は、{役割}のみ低く、{教化}と{関心}では高いという基準で選択された群である。しつけ尺度の11下位尺度のうち、「親の学習への関心」のみ最も高く、「学習意欲」では第I群に次ぐ低い値であり、他の9下位尺度では第IV群に次ぐ高い値である。社会的役割にはあまり関心はなく、学習面に関心を持っている群と考えられ、「教育ママ群」と命名する。

第IV群は、被養育経験の3下位尺度全てで高い得点を取った群であり、11のしつけ下位尺度でも「親の学習への関心」以外の10下位尺度では最も高い値を取った群である。「しっかり群」と命名できよう。

## 2. 母親の被養育型による養育行動の違い

### 1) 母親の養育行動の差

母親がどのような被養育経験を持ったかによって、子どもへの養育行動に差がみられるかどうかを見るために、上記の4)の被養育型によって子どもに行ったと認知している「養育行動」の得点の差を見たものが表5である。

母親の養育行動では、{教化}・{役割}・{関心}のいずれにおいても、分散分析の結果、有意差が見られた。TukeyのHSDによる下位検定の結果、{教化}に関しては第I群の「放任群」の値が最も低く、第III・IV群との間に有意差がある。{役割}に関しては、第I群が最も低いが、第IV群のみが有意に高い。{関心}に関しては、第IV群が最も高く、第I群のみが他群よりも有意に低い。

表5 母親の養育行動の分散分析結果

		I 放任群	II 受容群	III 教育ママ群	IV しっかり群	F	df	p	下位検定
母親の養育行動	教化	3.50(.73)	4.00(.23)	4.11(.51)	4.42(.53)	7.64 (3,47)	***	I < III, IV	
	役割	2.88(.88)	3.20(1.01)	3.43(.41)	4.08(.57)	8.66 (3,46)	***	I, II, III < IV	
	関心	3.29(.61)	4.12(.58)	4.16(.38)	4.38(.51)	12.81 (3,47)	***	I < II, III, IV	

\*\*\* :  $p < .001$

表6 子どもの被養育経験およびしつけ下位尺度の分散分析結果

	群 人数	I 放任群 16	II 受容群 8	III 教育ママ群 7	IV しっかり群 22	F	df	p	下位検定 結果
子どもの 被養育経験尺度	教化	3.72 (.90)	3.84 (.58)	4.18 (.32)	4.10 (.42)	1.53 (3,49)			II, I < IV
	役割	3.04 (.45)	2.96 (.59)	3.16 (.31)	3.65 (.58)	5.91 (3,49)	**		
	関心	3.64 (.72)	3.61 (.66)	3.94 (.58)	3.99 (.65)	1.17 (3,49)			
容認と支援	関わりの重視	4.19 (.68)	3.79 (.69)	4.14 (.81)	4.14 (.55)	0.74 (3,48)			
役割	地域活動	3.75 (.82)	3.76 (1.37)	4.52 (.50)	4.25 (.70)	4.32 (3,47)	**		I, II < IV, III
規範と期待	慎重な行動	4.31 (.98)	4.04 (.92)	4.81 (.26)	4.78 (.30)	3.32 (3,48)	*		II < IV
	他家族との交流	3.31 (1.10)	3.92 (.94)	3.76 (.90)	4.11 (.86)	2.17 (3,48)			
	親への尊敬	2.33 (.99)	2.46 (.71)	2.78 (.54)	2.95 (.99)	0.80 (3,47)			
多様な活動の場	将来の展望	3.33 (1.00)	2.54 (1.11)	3.71 (.56)	3.67 (.71)	3.74 (3,49)	*		II < I, IV, III
価値観	正しい行い	4.42 (1.00)	4.42 (.58)	4.76 (.32)	4.68 (.45)	0.80 (3,49)			
自己確立	良いモデル	2.17 (.86)	2.25 (1.04)	2.76 (.98)	2.87 (.85)	2.30 (3,48)	+		
	意思の遂行	4.10 (.80)	3.46 (.64)	3.95 (.56)	4.08 (.56)	2.04 (3,48)			
社会的能力	好き品行	3.54 (.90)	3.75 (.71)	3.95 (.71)	3.88 (.89)	0.62 (3,49)			
学習への 傾倒	親の学習への期待	3.81 (1.19)	3.54 (.92)	4.19 (.57)	4.39 (.42)	2.74 (3,49)	+		II < IV
	学習意欲	2.69 (.80)	2.33 (1.26)	2.62 (.85)	2.67 (.76)	0.34 (3,47)			

\*\* :  $p < .01$ . \* :  $p < .05$ . + :  $p < .10$ .

## 2) 子どもの認知する母親の養育行動の差

母親がどう養育行動をしたかを、子どもがみた被養育経験尺度およびしつけ下位尺度でのうち被養育経験尺度に含まれないものの結果を表6に示す。被養育経験尺度の「教化」・「役割」・「関心」のうち、分散分析の結果、有意な差がみられたものは「役割」のみであった。下位検定の結果、第IV群の「しっかり群」が第II群の「受容群」と第I群の「放任群」よりも高い。

この結果を確認するために調べたしつけ下位尺度のうち、分散分析の結果有意なものは、「地域活動」、「慎重な行動」と「将来の展望」の3つで、有意傾向のあったものは「良いモデル」と「親の学習への期待」であった。いずれの下位尺度でも第II群の「受容群」が低く、第IV群の「しっかり群」あるいは第III群の「教育ママ群」の値が高かった。

## まとめと討論

### 1. まとめ

本論文では、女子大学生とその母親の資料が揃った91組を分析の対象とした。安定した被養育経験尺度作成のため、母親に対して尋ねた養育行動の項目に対応する被養育経験の59項目を因子分析した結果、「教化」、「役割」、「関心」の3

因子が抽出された。この3因子に基づいて作成した3つの下位尺度得点の高低によって型の分類を行い、各群に該当する人数が多い「放任群」・「受容群」・「教育ママ群」・「しっかり群」を以後の分析の対象とした。

母親の養育行動にはそれぞれの群を特徴付ける祖母からうけた被養育経験と一致する傾向が得られたが、子どもである女子大学生が認知する母親からの被養育経験で群差が見られたのは「役割」に関してのみであった。

## 2. 討論

### 1) 被養育経験の時代差

母親と子どもである女子大学生の被養育経験3下位尺度の結果は表2に示したが、第1尺度である「教化」と第3尺度の「関心」で、女子大学生の評定値の方が有意に高かった。第2尺度である「役割」に関しては母親の評定値の方が高かったが、その差は有意ではなかった。この結果は、前報告で明らかになった母親と子どもである女子大学生との被養育経験の差をより明確に示したものである。つまり今の母親は子どもと共に行動し、子供の情緒にもより強い関心を持ち、規律や子どもの態度にも関与している。そして、学業に関心を持っている。しかし、子どもに自分が受けた経験よりは役割分担や整理整頓は求めず、親戚との

日常的交流も自分の子ども時代ほど行っていない。これは経済的豊かさ・少子化によって少数のかけがえのない子どもに関心を向け、高学歴社会の到来によって子どもに勉学の関心を向けるようになっていたためと思われる。現在の大学生の小学校時代はゆとりの教育が強調されていたが、母親達は余裕を子どもへの愛情と関心に向け、社会性の獲得のためのしつけよりも無用なストレスを与えないようにとの配慮の元に養育を行っていたためと考えられる。

## 2) 母親の被養育経験と子どもに対して行った養育行動

今回作成した被養育経験尺度およびそれに準じて作成した養育行動尺度では、養育行動の得点の方が、被養育経験尺度得点よりも高かった。具体的には{教化}と{関心}で.01%水準の有意差が見られ、「役割」に関しては有意ではなく、{教化}と{関心}については受けた以上の養育行動を行っていることが明らかになった。この結果は、前報告で述べた、「差の大きなものは「受容・ともに行動・他家族との交流・意思の主張・学習意欲」であり、逆にしつけられた以上にはしつけていないものは「役割分担・職業との出会い・忍耐・良いモデル」があった(三浦・田中, 2011a, 2010b)」と一致するものである。大学生の母親たちは親として子どもの生活や行動に関与することが多かったが、それは子どもの社会的役割の獲得を除外する形で行われてきたと言えよう。

## 3) 母親の被養育経験 3 下位尺度と養育行動との相関

上記1)と2)から母親は{教化}や{関心}に多く関与していることが明らかになったが、被養育経験の3下位尺度と養育行動の3下位尺度との相関を見ると、表2に示すように両{役割}に関するものが.78と最も高かった。被養育経験が養育行動に最も強く影響を与えたのは{役割}であったと言えよう。家庭による養育態度の差異が最も現れたものと考えられる。母親の被養育経験と大学生の被養育経験の下位尺度間で最も相関が高かった下位尺度が{役割}であることも、このことを支持する。家風というものは被養育経験の{役割}という形で具現化していると思われる。{教化}や{関心}は、どのような経験を親から受けたかということよりも、時代風潮や母親の個

性、自分の受けた養育経験への評価によって変動する傾向があるが、{役割}に関しては自分が受けたような経験を子どもにも行っていると思われる。

## 4) 4 種の被養育経験型

{教化}{役割}{関心}という3下位尺度の高低の組み合わせによって、養育経験型を作成したが、可能な8通りのうち、出現頻度の高いものは4種類であった。特に、全得点が低い「放任群」と高い「しっかり群」の人数は多く、両者で全体の40%、有効被験者数の82%を占めている。4つの型はそれぞれ解釈可能な養育態度であることから実際にそのような養育態度・行動の型が存在すると考えることができる。

特に興味深いのは、{関心}のみが高い「受容群」と{役割}のみが低い「教育ママ群」で、現在の養育行動傾向の特徴を表していると思われる。{役割}のみが高い「厳格群」の出現頻度は3名と低かった。

ところで、被養育経験が子どもへの養育行動にどう影響しているかを見た表5の型別養育行動の結果は、被養育経験に沿った養育行動を取っていることを示唆する。しかしながら、表6に示すように、母親がどのように行動したかを子どもの側から見た被養育経験で差異が見られたのは、{役割}のみであった。{教化}や{関心}よりも{役割}は実際に日々の日常生活で行われる具体的な行動を示すものなので、差異が明らかになり易いかもしれない。

## 5) しつけの世代間伝達

表2に示した母親と子どもの被養育経験の相関で最も高いものは、{役割}の.50であった。{教化}は.38、{関心}は.21と統計的には有意であるが、それほど高い相関ではなかった。また、表6で示す母親の養育経験型による子どもの養育経験の3下位尺度およびしつけ下位尺度で、群間に差の見られたものは、養育経験尺度の{役割}としつけ下位尺度の「地域活動」、「慎重な行動」と「将来の展望」の3種のみであった。これらにおいては、第II群の「受容群」が低く、第III群の「教育ママ群」あるいは第IV群の「しっかり群」が高いという結果であった。

これらの結果は、母親の被養育経験によって子どもの被養育経験が異なるということを示すもの



で、しつけの世代間伝達が生じたということの一つの証拠となる。しかし、その世代間伝達は筆者らが当初想定していたような顕著なものではなく、{役割}あるいは「将来の展望」という限られたものであった。世代間伝達と言うよりも時代の変化に伴う考え方や生活様式の変化の方が大きく影響を与えていたといえよう。

### 3. 今後の課題

#### 1) 本研究の限界

本研究で得られたことが戦後の日本のしつけの特徴を表すものであることを示すためには、また特に各被養育型の分布が妥当であるかどうかの検討にはその調査資料の吟味が必要となってくる。{教化}や{関心}は低く{役割}のみ高い「厳格型」の出現頻度が4%と低いことは直感的には了解可能であるが、現状を表しているのであろうか。また、多くの調査対象者が「放任型」と「しっかり型」に偏っていて、「受容型」や「教育ママ型」に属する調査対象者が十分な数を確保できていないことは、それぞれの群の特徴記述の分析の信頼性を低めている虞がある。本調査は、ある私立女子大学学生とその母親から得られたものである。その女子大学の学生およびその母親が現在の世代を代表するかどうかについて、また、調査を依頼した学生の全てが回答してくれたものではない。母子が両方とも自発的に回答してくれていることだけでも良好な母子関係を推定させる。

ところで、今回は母娘で資料を得ているが、男子学生ではこれとは異なった傾向が現れることが想像できる。母親の子どもに期待する特性が子どもの性によって異なるため、それは養育行動にも差異が見られると思われる。この点に関しても慎重なチェックが必要となろう。

#### 2) しつけの世代間伝達の検討

この調査研究では、母親とその子どもである女子大学生を対象としたものである。もしも世代間伝達ということの問題とするならば、戦後の価値観の変動が大きかった時代に子育てを行った祖母と母親間の被養育経験・養育行動の実態を把握す

る必要がある。祖母・母親・娘という3世代での検討が必要となろう。

#### 3) 父親を含めたしつけの実態把握

それぞれの家でのしつけは誰に決定権があり、だれが実行しているのであろうか。筆者らはしつけは子どもと接触する機会が多い母親が実行しているということを前提に女性だけを対象に調査を実施した。しかしながら、かつては重要なしつけの決定は父親が行い、母親はそれを執行していただけという考え方も成り立つ。さらには、家長(多くは祖父、あるいは本家の家長が)が家風を決定していたということも考えられる。また、最近では、夫婦してしつけについて考え、共同して実行しているということも考えられるし、夫婦間で意見の一致が見られないこともある。実際に、どのような力動が働き、子どものしつけが現在なされているかを把握することは、本研究とは離れたこととなると思われるが、本研究で作成した被養育経験尺度は、なにが行われているかを測定するものとしては役立つと考える。

### 引用文献

- 三浦香苗・田中千穂(2011a). 児童期の母親の具体的な関わり時代の差—女子大学生およびその母親の認知する被養育経験—. 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 13, 13-23.
- 三浦香苗・田中千穂(2011b). 母親の養育態度に関する研究4—大学生の母親が受けたしつけと行ったしつけについての認識の比較—. 日本教育心理学会, 第53回総会発表論文集, p.124.
- 田中千穂・三浦香苗(2010). 大学生の被養育経験に関する意識の研究—児童期における母親の関わりについて—. 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 12, 143-157.
- 田中千穂・三浦香苗(2011). 母親の養育態度に関する研究3—大学生とその母親が受けたしつけについての認識の比較—. 日本教育心理学会, 第53回総会発表論文集, p.123.

